この子供たち（3）

イーデイス・ウオートン作
松原至大譯

荒野を通りぬけて

E・ウオートン夫人

「母や父が、私たちと旅をしたがらない」と、あの少女は言つていた。

「母や父。」そう言えば、ボインにとつては、あの昔なじみの、クリフ・ホキータ夫妻のことでしか、あり得なかつた。そうだとすれば、隣りにいたやせすぎで、しつかりものらしいあの少女は、結婚後間もなく生れた最初の娘にちがいない。そしてその後、十三、四年して、あの娘が抱いていた健康そうなチップが生れたのだ。

「いやに古風だな、なにもかも。」と思うと、ボインは夫婦というものに対する考え方に、勇気づけられた。そしてドロマイツに待つている、もう五年も会わない婦人に会いに行くことも、より多く軽やかに思えるのであつた。チップのようなまるまるとした子供を持つ親は、さぞかし楽しみにちがいないと思うのである。

けれどボインが、クリフ・ホキータ夫妻の謎を、首尾よくといたと思つたのも束の間、ジニー、バン、ビーチーという妙なトリオのことを思いだすと、ボインが手際よく描いた方程式は、混乱してしまつた。ジュディスを一つの端として、チップをもう一つの端として、こわれない一つのサークルを作つているように思えるこの家族団の中に、お

母さんのちがう子というのは、一体どこに位しているのであろう。バンとビーチーが、あの少女のいつたように「外国人よ、イタリヤ人よ。」であるならば、この二人は、ホキータ氏にも、夫人にも属していないことになる。

オレンジ色をしたもじやもじやの髪の下に、上をむいた鼻がついている。そばかすだらけの生意気なジニーの顔はほかの小さなイタリヤ人たちとは、血がつながつているとは思えなかつた。ジニーは、全くのアメリカ人のように見受けられた。ほかの三人の兄妹よりも、アメリカ人らしかつた。ほかの三人は、コスモポタリン的交渉によつて、よほどすれていたからである。これらの母のちがう子供たちは、植物学者がいうところの種族を代表する確然さを持つていた。それに比べて、ジュディスやブランカやテリーは、庭に咲き出た美しい雑種ともいえるであろう。

ボインが、そう思つているところへ、スコープと呼ばれる婦人がきた。かの女にとつては、ボインがクリフ・ホキータ夫妻と友だちであつたということが、確かに安心感を与えた。

「ジニー君は、たしかに外国人ではありませんね。」と、ボインがいつた。

「いえ、私どもの習慣に比べて申しますと、外国人でございますよ。お父さんの方に——」と、スコープは言いかけてから、声を小さくして、あたりを見ながら続けた。「あなた、ジニア・ラクロスという映画スターをご存じでございましよう。」

ボインは、やつとのことで思い出した。

「いつぞや、競馬に関係のある男と、結婚した女じやありませんか。ロードなんとかという。」

「私はあの人が、最近どんな大それたことをしたか存じませんが、ホキータさんと結婚したことは、大それたことでございましたよ。そしてジニーさんが生れまして——」

ジニア・ラクロスが、クリフ・ホキータと結婚した。そうすると、チップストンの母親は、一体だれなのか。ボインは、

「もうこの上の謎は、やめてくれ。」と、がなりたい思いに駆られた。だが、打ち明け話に調子づいたお隣りの人は

おかまいなしに続けた。

「ほんとうなのでございますよ。ホキータさんが、ジニア・ラクロスと結婚なさつて、ジニーさんが生れました。ほんとうのところ、ホキータさんばかりが、いけないのではございません。奥さまが家出をなさつてからというものは、ホキータさんはすつかり元気をなくしていらつしやいました。それに是非もうひとり、男のお子さんをほしがつていらつしやいました。あの沢山な財産の相続人といたしまして。」

ここでボインは、水におぼれた人のように、助けを求めなければならなかつた。ホキータ夫人が、ホキータ氏を捨てたそれはいつだろう。どういう風にして、またなぜだろう。ボインは、この用捨のない話し手に、一つずつ話してくれるように頼んだ。こんなに一度に大勢の大人や、子供が出てきたのでは、かれのように長い間、「荒野」にばかりいた人間には、なにがなんだか、わからなかつたから。

「荒野とおつしやいまして。ほんとうの荒野は、私どもの住んでいるところでございますよ。いく週間か居ては、また天幕(テント)をまいて、よそへ出かけるのでございますもの。結婚は、ちようどその天幕のようなものでございます。用がなくなれば、たたんで捨ててしまう。」スコープは、同情してもらうためには、よくわかるようにお話しなければならないと思つた。あたりを見廻じてから、秘密を説明するためにすわりなおした。

ボインにとつて、ありがたいことには、バンとビーチーは、ホキータ夫人の子供ではなかつた。かれらは慎しみのないボンデルモント公爵と、あるいやしい一婦人――サーカスの女との間にできた子供で、公爵は正式に、その女と結婚したのだが、気の毒なホキータ夫人が、公爵に迷いこむ前に捨てられてしまつた。

「奥さまは、ホキータさんにむかつて、公爵といつしよになるのだから、別れて下さいといいはりました。ホキータさんは、大そう気前のよいところを見せて、『非は自分にある』とおつしやつて、離婚をお認めになつたのです。けれどいい分(ぶん)として、テリーはご自分の手元におくこと、ジュディスとブランカは、毎年四カ月だけは、父をたずねてくれることを主張なさいました。そして手切れ金のことで、大もめができて、奥さまは、子供のことについては、

譲歩なさらなければなりませんでした。ジュディスさんが心をいため初めたのは、その時からでございます。たとえどんな小さなことについても、両親が争いをするということは、ジュディスさんにとつては我慢のならないことでした。」と、スコープは説明した。

だが、そのジュディスも、しまいには慣れつことなつてしまつた。ただどうしても慣れることのできなかつたことは、この離婚と二組の再婚とが成立した後に、テリーと別れて、毎年ブランカといつしよに、ホテルからホテルへと二組の両親のいるところを往復させられることであつた。ジュディスの顔が、大人びているのは、そのためだと、スコープは思つていた。

幸に、ホキータ夫人の迷いは、そう長くは続かなかつた。結婚して一年もたたないうちに、公爵は本性をあらわした。それで迷いからさめた夫人は、公爵と離婚することになつた。その時夫人は、パンとビーチーとがかわいそうでならず、二人をひきとつて、ずつと手元におくことにした。いうまでもなく、その子供たちの父親は、顧つてもない幸と喜んでいたのである。ここまで語つたスコープは、「おわかりになりましたか。」と、ボインに念をおした。ボインは、

「ええ。わかりかけましたな。だが、チップストン君は。」と、きかずにはおられなかつた。

「ああ、チップちやんでございますか。あの子も、ホキータ家のものでございますよ。お父さんに生きうつしとはお思いになりませんか。ホキータご夫婦は、初めてご自分たちのあやまちに気がおつきになつて、初めから出なおすことにして、三年ほど前に、お二人は結婚をしなおされました。それからチップちやんが生れまして、万事をまるく納める役をなさいました。今のところでは。」

「今のところ。」と、ボインは息をついた。家庭教師のスコープは、褐色の髪をなであげてから、やつれた顔を、ボインの正面にむけた。

「私が、事実を申し上げたいと思いますれば、どうして『今のところ』以上のことが、申し上げられましよう。こ

れもみんな十三才のジュディスさんのおかげです。何ごとも今は無事に運んでおります。ジュディスさんのうしろには、子供たちがみんなついています。子供たちは、もう離れ離れになるのは、いやだと申しております。つかみ合いはしますけれど。」これが、その答えであつた。

デッキが暑くて、まぶしいのと、ほかの船客がうるさいのとで、ボインは、本を手にして、昼食後ぼんやりと、ベットの上に横になつていた。

「おじさん、ゆつくりお話をしたいんですが、いいでしようか。」細つそりとして、灰色の装いをした小さな訪問者が、ドアによりかかつていた。テリーであつた。ほお骨のあたりが桜色になつて、まつ毛の長い目が輝いていた。時としてこのすなおな少年の顔は、いたいたしいほど美しかつた。

「やあ、いいとも。もう少し涼しくなるまで、ここにいた方がいいんですよ。」

テリーは、ボインのそばの椅子に腰をおろした。

「なにかご用、テリー君。」

「ぼくに、家庭教師をつけてくれるように、すすめてくれませんか、あの人たちに。」

「あの人たちに。」

「ホキータ夫婦のことです――お父さんとお母さんのこと。」と、テリーは大人らしい口調で、いいなおした。ボインは、この子供たちが、両親を呼ぶのに、姓をつかうことは知つていた。スコープの説明によると、かれらが、旅から旅への生活を続けているうちに、できた大勢の友だちの間では、お父さん、お母さんという言葉が、連絡的に、または同時に、いろいろな人を指して使われていたので、自然にそういう習慣になつたというのであつた。一昨年ピアリッツで出会つた髪の黒い、大きな真珠の耳飾りをつけた驚くべき少女などは、両親がおこなつたいろいろな結婚と自分がそれからそれへと貰われて行つた経路とを、タイプでうつた表を持つていて、新しい友だちができると、それを見せていたというのであつた。それに付け加えて、スコープは、こういつたことがある。

「ただ今では、皆さんがそういうことをなさいます。つまり両親のちがつた組を、姓で呼ぶのです。それで、私どもの子供さんも、それを真似しているのですが、幸なことには、もうそんな必要もございません。お父さんとお母さんとが、もともと通り、ごいつしよになられましたから。」

「お父さんとお母さんのことなのです。」と、テリーは繰りかえした。「ぼくを教育しなければいけないつて、忠告して下さい。ぐずぐずしていては、いけないのです。言つて頂けるのは、おじさんのほかにはありません。」テリーの目は、熱病患者のように、ボインの目を見つめていた。その顔には、ジュディスを時々不気味なくらい大人びて見せるのと同じ、ませた心配そうな様子が現れていた。

「ああ、もちろん、ぼくは、できるだけのことはしてあげたい。だが今度は、ご両親にはお目にかかれまいと思う。ヴェニスに着くと、汽車にとびのらなければならないから。」

「そうですか。困つたなあ。お姉さんもがつかりします。」と、テリーはうなだれた。「お姉さんも、ぼくも、おじさんは、ヴェニスに二日ぐらいは、いて下さると思いました。おじさんには、してもらいたいことが、たくさんあるんです。」

「君たちは、このぼくを買いかぶつているのじやないかな。ご両親にはずいぶんお目にかからないから、ぼくのことは覚えておらないかもしれない。ともかく、予定をかえてみるかな。」

「ええ、そうなさつて頂ければ。ぼくには、相談相手なんか、ひとりもいないのです。スコープは、父母にはなにもいい出せないし、お姉さんは、教育のことをお話するのには、あまり若すぎると、父母は思つているし、それにお姉さんは、自分が教育を受けていないのですから。父母は、ただ、ナースみたいな家庭教師をつけるだけです。スコープなんて。ぼくぐらいの年になれば、よその子は、もう小学校を卒業しています。なのに、ぼくとバンをいつしよにしているのです。」

ボインは心の中で、自分が幼い日にはいつていた隣(まち)のことを思い出した。世の中につき出されるまでの自分は、な

つかしいシーンを見て暮してきたのである。それなのに、ホキータ家の子供たちに会つて、第一に驚いたことは、かれらがあまりに浮世の風にさらされすぎているということであつた。ボインは、テリーの熱心な、物ほしげな視線に堪えられなくなつた。そしてなぜスコープが、テリーのことを話す時に、目をそらすのかがわかつた。

「では、二、三日滞在して、できるだけのことをしましよう。」ボインは、こう受けあつた。ほかのいろいろな計画や、日取のことを、きつぱりと思いきつて。この頼みは、ボインがひそかに心の中で、待つていたことでないとはいいきれなかつた。新しい友だち、わけてもジュディスと別れることは、さびしかつた。モーンレアーレへのあのピクニック、海上での晴れ続きの日、子供たちの身体から発散する生活力が、彼の身体にしみこんでいた。子供たちが結びついているつながりのはかなさと、それをこわすまいとする決心とは、ボインの心を、少からずひいた。この決心の中には、ボインには悲劇と思われるものがあつた。子供の本来の想像力を、はるかに超越した経験の連鎖と、予想の力とが含まれていた。ボインの体験では、通常の子供にとつて、別離というものは、前もつて悲しむにはあまりに漠然としたことであるし、それに直面すれば、物珍しさの興奮や単調から救われることなどのために、楽しい冒険の気持ち以外に、心もとないなにものも感じないものである。組立の玩具さえあてがわれれば、家からどこへやられても悲しかつたという思い出は少しもなかつた。たとえボリッジが、自分の家のほどおいしくなくとも、夕食の後で、童話を読んで下さるお母さんがいなくとも。

ボインは、自分が変化と名づけることは、ホキータ家の小さな人々にとつては有りふれたことで、かれらにとつての変化ということは、過激な、身のちぢまるようなことで、ボインにとつてみれば、組立玩具がこわれたとか、折角飼つていた白ねずみが、飢え死にをしてしまつたとかいうことと、同じであることが、やつとわかつた。変化ということが、家庭の人や物との暖い団欒から永別してしまうことであるとは、子供のボインには、およそ考えもつかないことであつたと同じように、ホキータ家の子供たちには、平穏無事というものは、考えられないことであるらしい。

ジュディスのいうところでは、いつも大きなホテルで知り合いになつた小さな友だちは、大方は、かれらと同じ境

遇にあつた。小さい時に、同じところにじつと暮していることなどは、できるものではないというテリーの言葉を聞いたり、子供たちは、なぜ連合して移動生活に反対するのかという理由を、ジュディスが聞かせてくれたりする時は、ボインは、動物が虐待されているのを見ているような、いやな気持ちに襲われた。なんということであろう。双子のきようだいの賛同を得ようと望む冷いブランカの自己中心と、ビーチーの極端な自己没却との相違を考えたり、ひとり離れて、あけつぱなしのジニーと、ひねくれてわがままなバンとを比べたりして、子供たちの性格の、いろいろな相互作用を見ているうちに、ボインは、かれらを結びつけているものは、遺伝作用を超越したジュディス・ホキータの強い愛に、ほかならないことを見出して驚いた。とにかく彼は、この連中といつしよに、ヴェニスへ行つて、ホキータ夫妻に会うことに、興味を持ちはじめたのである。（つづく）

× × × ×

（お知らせ）

倉橋先生を中心とした保育応答研究会は、種々の都合によりまして、残念ながら昨年十二月迄で、とり止めさせて戴きます

毎回御熱心な多数の方々の御参加を得ましたことを、心から感謝致しますと共に、右の件をお知らせ致します

フレーベル館内
保育応答研究会係

幼児の教育　第三巻　第七号
定価　金五十円
昭和二十八年七月二十日発行
東京都中野区千光前町一〇
編集兼発行者　倉橋惣三
東京都文京区大塚町三十五
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会
東京都板橋区志村町五番地
印刷所　凸版印刷株式会社
東京都千代田区神田小川町二ノ五
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番
○本誌御購読について注文申込その他はすべて発売所フレーベル館宛願います